

国語科

主体的な読み手を育てる読書生活指導に関する研究

—小学校3年生の読書日記を中心に—

細 恵 子

1 はじめに

平成20年3月に改訂された小学校学習指導要領解説国語編では、「読書の指導については、読書に親しみ、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりするため、読書活動を内容に位置づける。」と述べられ¹⁾、いろいろな本や文章などを選んで読むことや複数の本や文章などを選んで比べて読むこと、感想を述べたり考えを表現したりすること等が重視されるようになった。つまり、子どもたちの読む意欲、主体的な態度、読み方の技術を育成する指導、実生活に生きる読みの力を育成する指導が期待されていると考える。

筆者は、将来につながる主体的な読みの力を育てるため、これまでに、鶴田(1996)の「読みの技術」²⁾と足立(2004)が参照している諸外国の読書力評価³⁾、大村(1984)の「読書生活指導」⁴⁾、アメリカのリテラチャー・サークル⁵⁾等をもとに、読解力を含めた「読書力」を総合的な力ととらえ⁶⁾、以下のように「読書力」の定義をした。そして、学年、子どもの実態に応じて具体的な力を設定し実践してきた⁷⁾。

◆読書意欲・読書態度

◆読書技術

①選書 ②情報活用 ③文章理解 ④解釈

⑤自分との関係づけ

⑥感想・評価・批評

筆者は、子どもたちが本の多様な読み方を習得し、自分で本を選び、ものの考え方を広げたり深めたりすることができるようにしていく実践を行いたいと考えている。そこで、本年度は、小学校

3年生に主体的な読書力を育成するために、自分と関係づけて読むことを重視しながら多様な読書力を育成するアメリカのリテラチャー・サークルを中学年用に改善した読書会を国語科単元において取り入れると共に、日常の読書の生活指導として年間を通して読書日記の実践を継続してきた⁸⁾。

本稿では、3年生(38名)の読書日記の実践に焦点を当て、主体的な読書力(読書意欲・読書態度、読書技術)を育成する読書生活指導のあり方について考察することを目的とする。

2 読書日記の実践に関する先行研究の考察

野口(2009)は全国学校図書館研究大会の参加者による実践報告や議論をまとめた記事を分析の対象とし、これまでの読書指導の実践の推移を明らかにしている⁹⁾。それによると、読んだ本のタイトルと感想を書く読書日記やカード等の読書記録を基本とした取り組みは1950年代において確立し、自分の読書内容や生活を省み、深めることに重点が置かれていたと考えられている。しかし、1970年代に不読者の増加や読書離れの危機感から読書記録は子どもを本嫌いにさせるという批判的な意見が出されるようになった。

その後、1980年に『学校図書館』において「子どもを本好きにするために」の特集が生まれ、斎藤の実践が掲載された¹⁰⁾。斎藤は、小学校の子どもたちに3年間読み聞かせを行い、ノートに一口感想を書かせた。そして、短文でもキラリと光る言葉に丸をつけたり、感想文を一つ書いた後、読書ノートをはさんで対話をしたりした。この丸付けや対話は、子どもの意欲を高め、子どもの思い

をより詳しく知るといふ点で注目できる。しかし、この報告では、教師がどのような読書力をつけたいと考え、どのような表現を肯定評価したか、また、どのような対話をしたかといふことは明らかにされていない。

水野(1984)は、「読書日記」を書く目的を「自己の読書生活を記述することによって、読書生活のあり方、本の読み方などを反省したり、自己の読書の軌跡をとらえる喜びを感得したりすることにある。」と述べており¹¹⁾、読書意欲や習慣を育てる取り組みをしてきた。そして、読書日記を読書絵日記と読後感日記、読書生活日記に分け、自分の読書生活について記録を残す読書生活日記を重視した。水野は、読書日記から子どもの読書の様子や思い等を考察しているが、個に応じた朱書きがされたかどうかについては示していない。

大村(1984)は、「読書生活の指導」という言葉を意図的に使い、以下のように述べている¹²⁾。

「読書の技術といふのも、ただその方法を学ばせるだけでなく、目的や場合に応じて方法を選ぶといふことを知らなければならない。教養のために数少ない本をていねいに読むことに力を注いだ読書の世界から、自分の選んだ本を自分の選んだ読み方で読むといふことである。本を選び、その本の読み方を選ぶ、これが一人前の読書人である。」

このように大村は、教師主導ではなく、子ども主体で選書や読み方の技術を身につけていく大切さを述べている。

また、大村はそれまでの単なる読書案内や「読書感想文」といふ形で書くことが必ずしも読書指導ではないととらえるようになり、読書をしているときのひらめきのようなものをとらえることを重視し、中学生に読書日記を書かせた。大村が生徒に実践した読書日記は1日1行くらいのつもりで毎日読んでいる部分について記録をするものであった。優れた感想文をまとめて書くことではなく、感想の下地となる心の掘り起こしを指導することを大切に、読書の習慣をつけることを一番の目的とした。しかし、個の読書日記に対する具体的な指導については明らかにしていない。

斎藤や水野、大村の実践から筆者も、生涯にわたって読書に親しんだり読書を自分の生活に役立てたりするためには、読書日記では読書意欲の育成や読書習慣の確立をめざすことが必要だと考える。そして、大村のように本を読んで感じたり考えたりする心を育てることが不可欠だと考える。さらに筆者が定義した多様な「読書技術」も身につけることができるようにしていきたい。

3 本研究の改善点

本年度は、1日おきに読書日記を書くようにし、(読書日記を書かない日は生活日記を書く。)以下のてびきを子どもの読書日記の裏表紙にはらせ、自由に書くことができるようにした。

読書日記の書き方のてびき

1日に1行でもよい。書きたいときは多く書いてもよい。

- ①本の中のすきな文章や心に残った文章をうつしましょう。
- ②本の中のすきな場面、心に残った場面の絵をかきましょう。
- ③本を読んで思い出したこと(自分がこれまでにけいけんしたこと、テレビやえい画で見たこと、本を読んだこと)を書きましょう。
- ④本を読んでふしぎに思ったことや心に残ったことを書きましょう。
- ④とう場人物のせいかくをしょうかいしましょう。
- ⑥自分の読書生活をふりかえりましょう。(自分はどんな本を読んでいるか。いつ読んでいるか。どれくらいの時間読んでいるか。どんなしゅるいの本がすきか。なぜすきか。)

筆者は、前述した3人の先行研究をもとに以下の3点を研究の改善点として、全体指導と共に個別指導を行った。

(1) 教師による評価

本研究では、筆者が定義した読書力(読書意欲・読書態度、読書技術)をもとに、一人ひとりの子どもに何が身についたのかを示す朱書きを行う。これまでの読書日記では、読書意欲や態度の育成の方を重視していたが、筆者はそれらと共に具体的な読書技術の育成もねらう。そのために、日頃

から国語科で学習した以下の「読み方」を掲示し、他の本でも活用できるようにしてきた。

- おもしろいところ、すきなところ、ふしぎなところ、感動したところ、疑問に思うところ
- 人物に対する思い、人物関係
- 人物の気持ち
- 人物同士をくらべる。
- 大切なこと、学んだこと。
- 考えが変わったこと。
- 作者が伝えたいこと。
- 本の内容や表現に対する思い。
- 自分と人物をくらべる。
- 自分だったら・・・と考える。
- 思い出したこと
- これまでの自分、これからの自分。

筆者は、一人ひとりのできた読み方や考え方、意欲等が表れた文章に花丸を付けたり肯定的な評価の言葉を書いたりして、子どもが自分の伸びを自覚することができるようにした。また、大村（1984）のてびき¹³⁾を参考にして、感想を引き出したり広げたりするための問いや書き出しの言葉を書くようにした。また、分からないことについては質問を書き、子どもがそれに答えるようにし、ノートを通した対話ができるようにした。

(2) 子どもと教師との音声による対話

休憩時間を使い、読書日記をもとに子どもの読書に対する思いや読書の様子、本の選び方等を聞き、認めたり助言したり適した本を薦めたりした。

(3) 子どもの振り返りによる自己評価

生涯にわたって学び続けていくためには、教師による評価だけでなく、子どもの自己評価力も不可欠である。そこで、子ども自身が読書日記を振り返る場（家庭学習の中）を設定し、自分の伸びや課題を自覚し、次の読書の目標を決めることができるようにした。

4 指導の実際

ここでは、子どもの読書日記（一部）とそれに対する指導（朱書き、対話）を取り上げる。Tは、筆者が書いた朱書きである。波線は筆者が読書日

記に引いた線であり、そこに花丸も付けた。

(1) A児の読書日記から

A児は9月8日に『銀河鉄道の夜』の中で一番強く感じたこと（悲しかったこと）について書いたので、筆者は「ほかの宮沢賢治の本も読んでみたらどうですか。」と朱書きした。9月26日には宮沢賢治の『月夜のけだもの』、9月30日には同作者の『雪わたり』のおもしろかったところを書いた。10月3日には『注文の多い料理店』を読み「ふつうなら、ぎゃくに食べているけど、動物の気持ちになれるおすすめの1さつです。」と書いた。そこで、筆者は、「ふつうとはぎゃくのところがかわっていますね。みやざわけんじの本をつづけて読みましたね。」という朱書きにより肯定評価をし、A児と対話をした。A児は「ねこは動物の代表。人間が動物にひどいことをしたので、紳士にしかえしをした。」と言った。筆者は、紳士だけでなく山猫の視点からも物語の内容を考えたA児を誉めた。

○ 10月31日『走れメロス』

ぼくの一つ目の好きなところは、どうしても友だちをまもろうとするところです。 どうしてかという、ちゃんとなかまを大切にしていると感じたからです。

ぼくは今まで、友だちはどういうものかを考えたことがなかったけど、考えてみたら信じれる友だちがいるとたくさんいいことがあって、いろいろな一人ではできないことができると感じました。

またこれからも太幸おさむさんの本などを読んで、いろいろなことにやくだてていきたいです。 この本は、ぼくにとって一つのいいところがあると思います。

T・・・深く考えることができましたね。

○ 11月30日・・・対話の中で

筆者がA児になぜ宮沢賢治の本を読んだのかと聞くと、小さい頃からお母さんが宮沢賢治の本の読み聞かせをしてくれたことや、東日本大震災の後には、お母さんがさりげなくA児の目につきやすい所に宮沢賢治の本を置いてくれていたこと、その頃、『雨ニモマケズ』の朗読を聞き、図書館

で宮沢賢治の伝記を読み始めたことを教えてくれた。また、図書館でパソコンを使って本を選ぶことも教えてくれた。これまでの読書日記からは高学年が読む本を読んでいることや以前に比べ自分の思いを多く書けるようになったことが分かっていたので、そのことを誉めた後、他の学習でもその力を出すよう励ました。

○ 12月3日『青い花』

ぼくはこの本を読んで、金がもうかったからと言っても、たのみは聞かなくてはいけないし、物を作るときには、気持ちをこめて大切にきれいに作らなくてはならないと思います。(中略)さい後の場面で、女の子がていねいにする心を思い出させたように感じました。(中略)しょうかいありがとうございました。

T・・先生もそう思います。よく読み取れますね。
※この本は、今まであまり読んでいないファンタジーの作品も読めるとよいと筆者が考え、A児に紹介した本である。A児は、国語の読解テストでは点をとりにくいですが、進んで本を読み、登場人物の存在意味、作者の伝えたいことを読み取ることができていたので、筆者はA児を誉めた。

○ 12月5日・・・対話の中で

A児は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の本は2冊読んだと言い、それらの違うところを教えてくれた。読み比べる力があることも誉めた。今読みたい本は、一番悲劇の動物物語であり、本屋で本を半分くらいめくったらそのような本があることを知ったので、図書館で探すと言っていた。筆者が、『シートン動物記・スプリングフィールドのきつね』を紹介するとA児は興味をもち、進んで読み、読書日記に感想を書いた。

(2) B児の読書日記から

○ 7月6日『きりのなかで』

「ああ、おいら、なんてこと言っているんだ。いくら大こうぶつでも、もう二度とヤギはくわないとメイとやくそくしたのに。」と言い、友だちになった二人は強いきずなでむすばれていると思います。本当は、ヤギの肉が食べたいと思います。だけど、友だちを大切に作る心の方がガブには強

かったんだと思いました。メイもガブのやさしさが分かっていたから遠くにいても心はつながっていたんだと思います。いつまでもなかよくしてほしいです。

T・・人物の関係を考えましたね。なぜ、ちがうものどうしが友だちになれたかということ・・・

※国語科の「あらしの夜に」の学習後、シリーズを進んで読んだ。B児は筆者の朱書きの書き出しに対し、「思っていることが同じだから」と書いた。筆者はこの日記を学級の人々に紹介した。

○ 9月14日・・・振り返り

ぼくは、物語と図かんの本を読みました。さいしょは本を読むことが苦手で、短い物語を読みました。だんだんと読むことになれてきて、長い物語も読めるようになりました。(中略)

ぼくは、本当にいた人物や本当にあった話の本が読めていないので、読んでみたいと思いました。(中略)

本を少しずつ読めるようになってからは、図書館によく行くようになりました。たくさんのおもしろい本があるので、これからも図書館を利用していきたいです。

ぼくのお気に入り『大きなありがとう』という本です。「ありがとう」の言葉はふつうだけど、この本を読んで大事な言葉だということを学びました。それは言われた方もうれしいけど、言った方もいい気持ちになれることです。心にひびき、読書日記に書いた中で一番いんしょうにのこっています。

T・・物語を読むことになりましたね。本から学ぶことができますね。

○ 10月10日『たいせつな伝記』

ぼくは、「宮沢賢治」の場面を読みました。(中略)童話や詩を書き、有名なものが『雨ニモマケズ』と『銀河鉄道の夜』などです。宮沢賢治は、『雨ニモマケズ』のそのままに生きたいと願ったそうです。

T・・伝記を読んだのですね。宮沢賢治の他の本も読んでみるといいですね。どんな人かがよく分かるようになると思いますよ。

○ 10月28日『雪わたり』

(略) きつねは、幻灯会を開くまでずっとつらい気持ちでいたと思います。ぼくもきつねの気持ちになったらすごく悲しい気持ちになります。本当のことも知らないのにかつてに決めつけてはいけないと思いました。 (略)

T・きつねの気持ちを考えましたね。決めつけないでおたがいに分かり合うことが大切ですね。

○ 12月14日・・・振り返り

読みながら、その人物の気持ちがすぐわかるようになったと思います。だから本を読むことが少し楽しくなりました。(中略)本を読むということは、いろいろな作者の気持ちが分かつたり、自分の気持ちとくらべられたりするので勉強になりました。

T・そうぞうする力がついたのでですね。

※12月19日には、本当にあった本を読みたいと言いに来た。そこで、学級文庫の伝記やノンフィクションを紹介したところ、B児は、今までにあまり読んでいないものを読みたいと言い、『電池が切れるまで』を選んだ。

(3) C児の読書日記から

○ 9月17日・・・振り返り

今までの読書日記を読み返すと自分では気づかなかったけど、大好きなようせいの本についてたくさん書いていると思いました。さいきん伝記をよく読んでいるけど、読書日記に書いていないことも気づきました。『クララ・シューマン』『モーツアルト』『ヘレン・ケラー』など感動した本がたくさんあったし、これからもたくさん読みたいので、今度から伝記の読書日記もせつきよくてきに書いていきたいです。

わたしは、本を読むのは大好きだけど、読書日記や読書ちょきんなど感想を書くのはめんどくさくていやでした。でも今回、自分のを読み返してみると、おもしろかったし、意味の分からない文章があつてわらってしまいました。これからもがんばって書きつづけたいです。

T・今度、伝記のことを教えてくださいね。

○ 10月27日『アンネ・フランク』

私は、この本を読んで泣いてしまいました。わけは、アンネがかわいそうだったからです。アンネ・フランクはしゅうよう所に入れられないためにかくれやで2年以上もくらします。かくれやでの生活はすごく大変で大きな音もたてたらいけないし、外にも出られません。そんな生活は私だたら考えられません。(中略)その後、アンネは15さいでしんでしまいました。1か月後にしゅうよう所が解放されたのであと1か月生きていたらアンネも助かったと思うと悲しくてくやしいです。せんそうはぜつたいにいけないなあと思いました。日本は今平和です。

今度は『アンネの日記』を読んでみたいです。T・アンネに対する自分の思いを書きましたね。※この感想にさらに時代の様子やアンネの気持ち、アンネから学んだこと、自分がしていきたいことを加えて、校内の読書感想文集に出した。

○ 11月21日『サリバン先生』

サリバン先生はすごいなあと思います。すごいわけは、びんぼうで、お母さんがしんだり弟がしんだりしてもくじけずに一人でがんばるからです。私だったらだれかがしんでしまったら何もできないと思います。でも、サリバン先生みたいにくじけずにがんばりたいです。

T・強い心がいますね。アンネもくじけない人でしたね。伝記のことを書きましたね。

○ 12月5日・・・対話の中で

C児は伝記が一番好きだと言った。はじめはお母さんが「伝記を読むと歴史を習う時に役立つよ。」と言ったので読むようになったそう。筆者が伝記に対する思いを聞くと「物語に比べて実際に起こったことなので、うきうきする。」「有名な人はすごい。」「実際のことを書いている筆者はすごい。」と言った。筆者は、C児に好きな本をどんどん読むとよいことや伝記はいろいろな人の生き方を知ることができることを話した。

(4) D児の読書日記から

○ 9月14日・・・振り返り

今までの読書日記を読み返して自分の好きな本はあつたかなとさがしました。そして、見つけま

した。わたしが好きな本は自分の心がわくわくする本と自分がやさしい気持ちになれる本です。なぜかというわくわくする本は気持ちも楽になるし、いい気分になるからです。やさしい気持ちになる本は自分がやさしくなったような感じになるし、友だちにもやさしくしていこうという気持ちになるからです。

これからの読書ではもっと好きな本をさがしていろいろな気持ちになりたいです。

T・・・好きな本の題は・・・

※D児は好きな本として『ふかい森のふたりはなかよし』と書き加えた。

○ 10月3日『おはよう』

この絵本の主人公のこねこのぼうやとにているなと思いました。どこがにているかという、さいしょははずかしくて「おはよう」って言えなかったけど、さい後にはきちんとあいさつできているところです。あいさつをすると気持ちがいいので、これからはもっと大きな声でしたいです。

T・・・自分と人物のたところやこれからの自分のことを書くことができましたね。

○ 10月31日『つるばら村のはちみつ屋さん』

私は、前から本を読むことは好きだったけど、あまり長い本は読みませんでした。この本をえらんだ理由は、1さつの中に短い話がたくさん入っているからです。私は、この本の「おちばのふとん」という話を選びました。(中略)ここからはまだつづきを読んでいないので、続きも読みたいし、シリーズの『つるばら村のパン屋さん』も読みたいと思います。

T・・・ぜひシリーズの本も読んでみてくださいね。

○ 12月15日・・・振り返り

わたしは、前のページをふりかえって思ったことは、花丸が多くなっているなあということです。だからたくさん花丸をふやしていきたいです。そのためにはもっとたくさん本を読んでほしい感想を書きたいと思います。

T・・・自信がついてきましたか。じょうずに書こうと思わず、すなおな思いを書いたらいいですよ。

(5) E児の読書日記から

○ 9月17日・・・振り返り

ぼくは、図かんや自然の本をたくさん読みました。いつも読書をしている時間は朝1時間、夜1時間半です。一番好きな本は自然の本です。なぜかという、昆虫や動物が何年前にたん生したかや、何のために生まれてどのように「しょくもつれんさ」になっているかが分かるからです。

これからの読書では、図かんばかり読まずに、物語の本も読んでいきたいし、本当にあった話も読みたいです。今自分が知っていることだけではなく、新しいことも分かってくるからです。だから、朝、図かんのような本を読んで、夜、物語の本を読みます。はじめは、自分がきょうみをもっている本からかりて、もっといろんなしゅるいの本を読みたいです。

T・・・自分の読書についてよく考えていますね。
※自分で読書の計画を立てるようになったので、この日記を学級の児童に紹介した。

10月31日から11月21日までは4冊の『シートン動物記』の長い感想文を書いた。

『シートン動物記 アカエリウズラの物語』を読んで書いた「ウズラも頭がいいです。きつねに見つかったとき、自分がとべなくなったようにきつねをだまして、とびかかってきたら「ひょいっ」とよけてとんでいくということです。そして、子どもを守りました。ぼくは、これまでシートン動物記を読んできたけど、大人になったらぼくも感動できる本を書いてみたいです。」に対して、筆者は「動物の知恵ですね。ゆめが広がりましたね。」と朱書きした。『シートン動物記 ホッキョクギツネの伝記』で書いた「ぼくは、動物がたたかうとき、自分がたたかっているのでもないのに、ドキドキします。動物どうしがたたかうのは、人間だったらせんそうみたいなこわいことだし、自分の好きな動物が負けるとくやしいです。」に対して、筆者は、「話の世界に入ることができているし、感想の書き方がとてもじょうずになりましたね。先生もお話にひきこまれそうです。」と朱書きした。この感想に、さらに動物の勇氣ある行動

や動物の姿から学ぶことを加えて、校内の読書感想文集に出した。

○ 12月5日・・・対話の中で

E児は一番好きな本が『シートン動物記』だと言った。理由は動物が家族を守るからだ。そこで、筆者は、椋鳩十の作品があることを紹介した。

○ 12月13日・・・椋鳩十『金色のあしあと』

はじめは絵だけを見て、何かこわいことやたいへんなことがあるのかと思いました。(中略)

ぼくが、キツネはがまん強いと思ったのは、子どもがくさりにつながっているときに、親が毎日ぼうをかんだりしているところからです。なぜなら、あきらめるのが早い動物は1回しっぱいしたらすぐにもうだめだと思えるものもいるけれど、キツネの親はがんばったからです。家ぞくだったらぜったいに守りたいという気持ちがあるからだと思いました。

T・・・動物の力ってすごいですね。

5 考察

(1) 教師による評価

読書力を定義し、具体的ななてびきを示しておくことで、筆者は常に読み方を意識して朱書きをすることができた。その結果、本稿で取り上げた読書日記でA児は、読書意欲・読書態度(同じ作者の本を読み広げる。自分の興味に応じて本を選んで読んだり紹介された本を進んで読んだりする。本を自分の生活に役立てようとする。)が育っていることが分かった。また、解釈力(物語で重要なことを考える。本と本の内容や表現を比べる。)、自分と関係づける力(今までの自分を見つめる。)、感想・評価の力(一番強く感じたこと、好きな所、展開の面白さについて)が身につけていることも分かった。B児は、読書意欲・読書態度(長い物語を読む。他のジャンルの本を読む。図書館を利用する。)が育った。また、解釈力(人物の気持ちを想像する。人物関係を読み取る。大切なことを学ぶ。)、感想・評価の力(人物に対する思いをもつ。)が身についた。C児は、読書意欲・読

書態度(好きな本を読み続け、それらの感想を読書日記に書く。関連する本を読み広げる。)が育ち、解釈力(人物の様子や気持ちを想像する。)、自分と関係づける力(自分だったら・・・と考える。自分のあり方を考える。)、感想・評価の力(人物に対する思いをもつ。)が育った。D児は、読書意欲・読書態度(好きな本を見つけ、増やそうとする。自分に合った本を選ぶ。シリーズの本を読む。多くの本を読み、感想を読書日記に書こうとする。)が育ち、自分と関係づける力(自分と人物を比べる。自分のあり方を考える。)が身についた。E児は、読書意欲・読書態度(いろいろな本を読もうとする。読書計画を立てる。好きなものに関する本を読み広げる。)が育ち、解釈力(人物の行動の意味を考える。)、自分と関係づける力(自分の夢をもつ。)、感想・評価の力(人物に対する思いをもつ。)が身についた。

また、学び合うことができる読書日記については、朱書きと共に学級全体に読み聞かせをしたり読書だよりで紹介したりした。そのことにより、筆者に紹介された子どもは読む意欲や読書日記を書く意欲を高め、学級全体では認め合う雰囲気ややる気が出てきた。そして、読み方を身につけていく子どもが増えていった。朱書きをもとに読書日記を紹介し合う場を設定することは、読書力育成において有効であったと考えられる。

読書日記において読書力を明確にして朱書きすることは、市販のテストでは測れない力を評価することになるという良さもある。

今後は、感想をもつこと、広げることが難しい子どもや自分で本を選ぶことが難しい子ども、文章を書くことが苦手な子どもに対して効果的な朱書きを工夫したい。

(2) 子どもと教師との音声による対話

A児やC児との対話では、読書日記には書かれていない保護者の思いや本の選び方、本に対する思い等も分かり、子どもにアドバイスをしたり、その子に合った本を薦めたりすることができた。A児やB児、E児は筆者が本を紹介すると、興味をもってその本や関連した本を読み、読書日記を

書くようになった。読書日記と対話を組み合わせると、きめ細かな指導が可能になる。

今後、普段書いている生活日記や学習の様子も参考にして、子どもが興味をもっていることから読書の世界へ導きたいと考える。

(3) 子どもの振り返りによる自己評価

これまでの読書日記を読み直すことで、B児は、自分のできるようになった読み方を自覚したり次の目標をもったりすることができるようになった。C児は、自分の読書の傾向に気づき、好きな本についてもっと書こうという意欲をもった。D児は、好きな本を見つけ増やそうとするようになった。E児は、自分の読書のし方を考え、次の目標を考えることができるようになった。読書日記はポートフォリオととらえることができる。自分の学習の足跡を振り返ることで、自分の伸びや課題を自覚し、次の目標をもつこともできるようになる。

今後は、子どもたちが具体的なめあてを自分で決めて継続することができるように読書日記を通して見守っていきたいと考える。

6 おわりに

同じ取り組みをしても、子どもの実態によって、反応はさまざまである。そのため、一人ひとりの実態や興味に応じて取り組んでいく必要がある。

今回は変容が顕著に見られた子どもたちの中から5人の子どもを紹介したが、まだ、多様な読書力が身につけていない子どもが5人いる。本の内容を理解することが難しい子ども、感想を表す言葉が少ない子ども、文章が膨らまない子ども、生活上の問題があり、集中して書かない子どもに対しては、今回の5人の変容から得たことを生かし、その子に合った取り組みを改善していく。

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』, p. 4, 2008, 東洋館出版社.
- 2) 鶴田清司：『言語技術教育としての文学教材の指導』, 1996, 明治図書.

- 3) 足立幸子：「読書力評価の国際標準にむけての一考察（2）—アメリカのNAEPを中心に—」『人文科教育研究』第31号, 2004.
- 4) 大村はま：『大村はま国語教室7 読書生活指導の実際（一）』, 1984, 筑摩書房.
大村はま：『大村はま国語教室8 読書生活指導の実際（二）』, 1984, 筑摩書房.
- 5) Daniels, Harvey: 『Literature Circles: Voice and Choice in the Student-Centered Classroom』, 1994, Stenhouse Publishers.
Day, J.P. et al. 『MOVING FORWARD with LITERATURE CIRCLES』, 2002, New York: Scholastic.
- 6) 細恵子：「「読むこと」の学習で育てる読書力の考察—アメリカのリテラチャー・サークルのヒントと日本の国語科教科書のでびきの比較を通して—」『国語教育思想研究』第4号, pp. 77-86, 2012, 国語教育思想研究会,
- 7) 細恵子：「小学校教育における読書活動の支援」難波博孝他編『読書で豊かな人間性を育む 児童サービス論』, pp. 136-149, 2012, 学芸図書.
- 8) 細恵子：「改善したリテラチャー・サークルによる読書指導の実践—小学校3年生の場合—」『国語教育思想研究』第5号, pp. 29-38, 2012, 国語教育思想研究会.
- 9) 野口久美子：「小学校・中学校における読書指導の実践に関する報告記事の分析：全国学校図書館研究大会を事例として」, pp. 111-143, 2009, 『Library and Information Science』No. 62.
- 10) 斎藤昌子：「読書ノートをはさんで子どもと対話」『学校図書館』353号, pp. 13-16, 1980, 全国学校図書館協議会.
- 11) 水野寿美子：『読書記録の指導』, pp. 71, 1984, 全国学校図書館協議会.
- 12) 大村はま『大村はま国語教室8 読書生活指導の実際（二）』, pp. 6-7, 1984, 筑摩書房.
- 13) 前掲書 12), pp. 380-387.